

文部省「幼稚園教育百年史」の刊行

このたび、文部省より、幼稚園教育百年史が刊行された。さきに、幼稚園教育九十年史が刊行されているので、重複する部分も多いのは当然であるが、百年史として構想を新たに集められている。九十年史では、幼稚園の制度、普及、教育課程と指導法、教職員、施設整備など、事項別に構成されているが、今回の百年史では、全体が年代順に構成され、戦後編に多くの紙数が増し加えられている。その他、写真なども新たなものが加えられていて面白い。資料編には、幼稚園教育百年史年表、教育法規、通達・文部省年報・文部省日誌、教育統計、その他が収載されていて、幼稚園関係の資料

集としての価値がある。とくに教育統計については、明治九年から昭和五十一年までの幼稚園数、幼児数、教員数、就園率、保育所の施設数、入所児童数、地方別・年代的推移、その他幼児教育に関する実態調査などの詳細な数字が掲げられており、大変に便利である。

わが国の幼稚園は、官立のもの私立のものなど多種多様であり、個人の有識者の力も大きな役を果して、その歴史を記すには、多角的な眼を必要とする。

九十年史はその多様さをよく反映している読みものとしても面白かったが、今回の百年史も、その点では同様の成功をしていると思う。明治以来のさまざまな施

設の写真、平面図などを見るだけでも、興味深い。

今回の百年史の結語には、幼稚園及び幼児教育の課題として、幼児を取り巻く環境の変化などいくつかの点が指摘されている。都市化に伴う住宅環境の変化、家庭教育との関連、幼稚園と保育所との問題、小学校教育とは異なったものとしての幼稚園教育の特色等、現代の幼稚園の当面している諸問題が挙げられている。むすびに適切に記されているように、幼稚園教育は小学校教育への準備教育ではなく、幼児期にふさわしい教育を探究してゆくところに今後の大きな課題がある。

(ひかりのくに 昭和五十四年
定価 一、二〇〇円)